

標識放流した八モを探しています！

海洋生産技術担当 岡崎 孝博

Key word ; 八モ, 標識放流, 小型底びき網

はじめに

本県の八モの漁獲量は平成 13 年以降, 高水準で推移し(図 1), 平成 21 年も 9 月までの漁模様からこれを維持したと言えるでしょう(図 2)。近年, 八モがよく獲れるのはなぜでしょうか。その主な要因として, 八モの資源量が増大したことが考えられます。その結果, 水温上昇などによって, 紀伊水道周辺海域における八モの分布域が拡大したのではないかと、内海でも越冬しているのではないかとといったことが推察されます。このような仮説を検証するために八モの標識放流を実施しました。

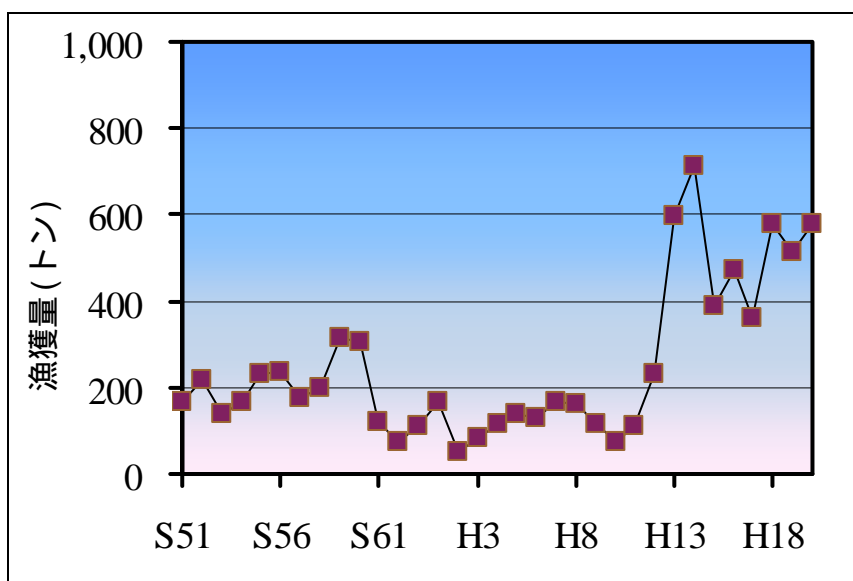


図 1 八モ漁獲量の推移 (徳島県計)

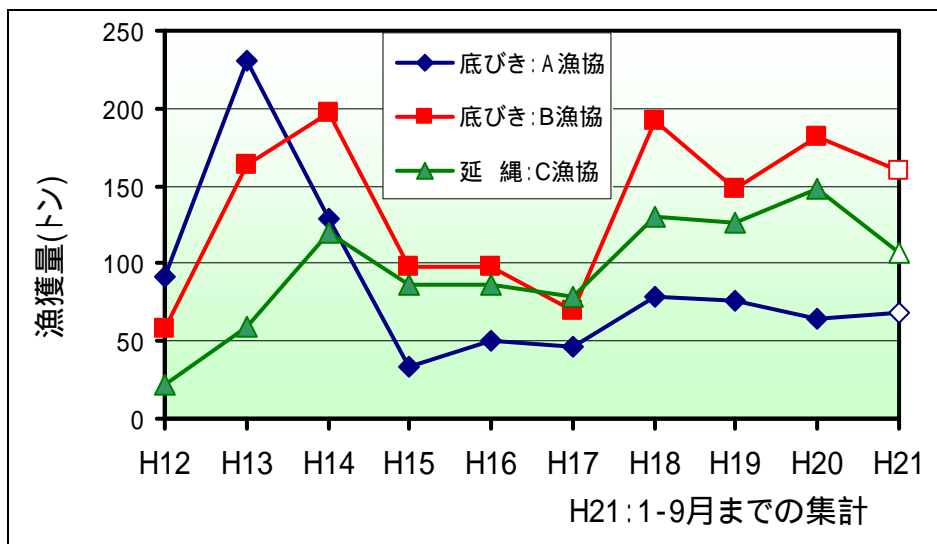


図2 標本漁協の八モ漁獲量の推移 (徳島県)

標識放流の実施

平成21年8月19日から9月24日に、紀伊水道で操業する小型底びき網によって水揚げされた八モをその日のうちに水産研究所に運び込んで5~29日間飼育した後、個体識別が可能なディスク型のプラスチック標識(直径12mm)を背鰭下部に装着し、播磨灘、紀伊水道、海部沿岸において、9月11日から29日に合計1,273尾(体重44~1,355グラム)を漁港岸壁あるいは漁船で沖合に運んで放流しました(表1,写真)。

表1 八モの標識放流実績 (徳島県)

放流場所	放流日	放流尾数	(重量:グラム)
播磨灘	H21.9.11	322尾	(65~1,115)
	H21.9.17	369尾	(44~1,355)
紀伊水道	H21.9.29	139尾	(80~850)
	H21.9.16	443尾	(60~1,160)
合計		1,273尾	(44~1,355)



写真 標識を装着した八モ

7 件の再捕報告

放流して 2 ヶ月余りの平成 21 年 11 月現在までに, 7 件の再捕報告をいただきました(表 2)。3 件は海部沿岸で放流したハモが紀伊水道へ, 他の 3 件は紀伊水道から大阪湾へ, 残りの 1 件は播磨灘から紀伊水道へ移動しており, 7 尾のうち 6 尾が放流場所から北上, 1 尾が南下しました(図 3)。

表 2 標識放流したハモの再捕実績(平成 21 年 11 月現在)

再捕日	再捕場所	放流日	放流場所	放流から再捕までの日数
H 21.9.28	紀伊水道(詳細不明)	H 21.9.11	播磨灘	7
9.24	紀伊水道(詳細不明)	9.16	海部沿岸	8
10.1	伊島の北 4-5 マイル	9.16	海部沿岸	15
10.5	大阪湾中部	9.17	紀伊水道	18
10.16	伊島北側	9.16	海部沿岸	30
10.19	大阪湾南西部	9.17	紀伊水道	32
10.21	紀伊水道北部	9.16	海部沿岸	35

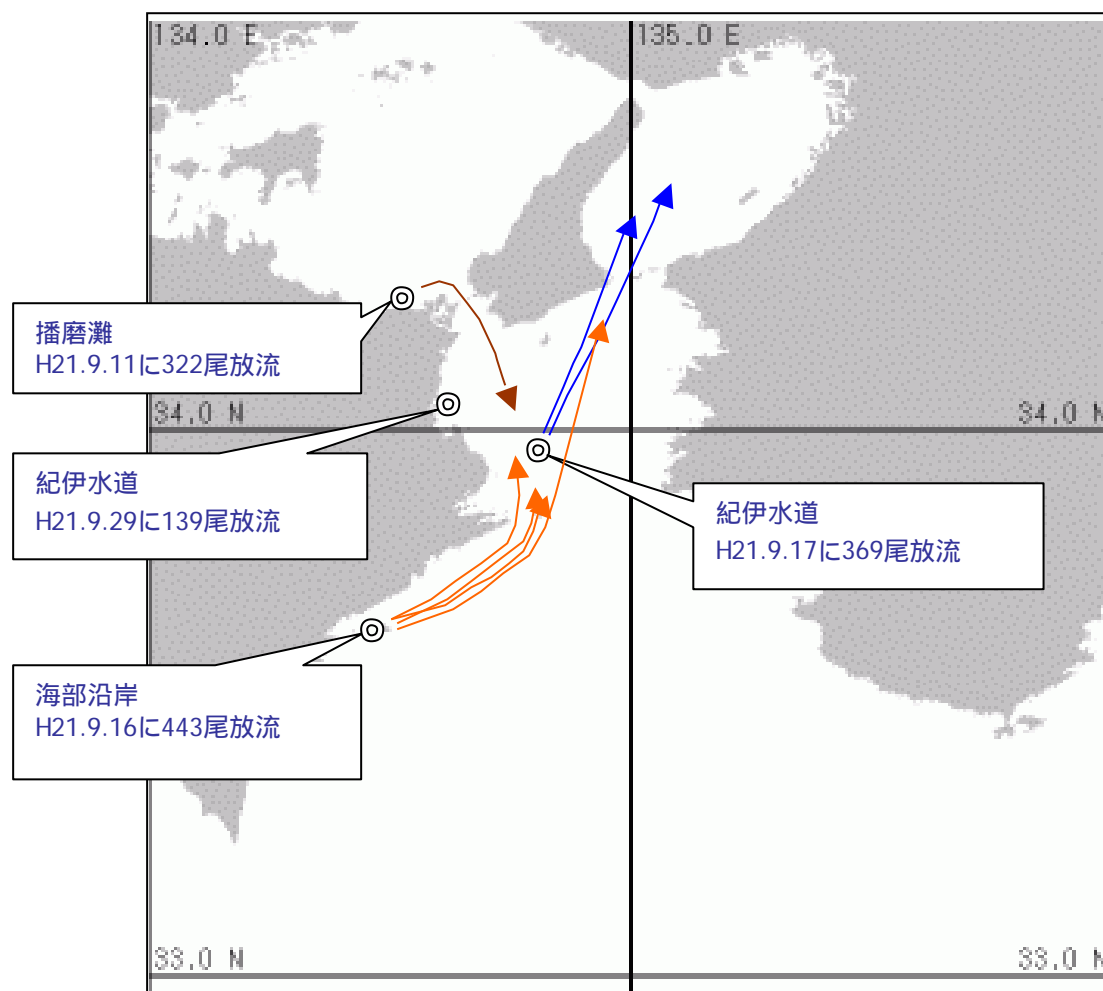


図 3 標識放流したハモの移動状況(平成 21 年 11 月現在)

これらの結果から、9～10月には、八モは活発に移動しており、紀伊水道などの内海域が主な活動海域になっていると考えられます。

紀伊水道の八モについては、1950年代に底びき網の試験操業から、夏から秋にかけて紀伊水道外海から紀伊水道内へ回遊し、冬季には紀伊水道外海へ移動することを、内海区水産研究所(当時の名称、国の研究機関)が報告しております(多々良, 1953年)。

また、平成元年～4年に徳島県が標識放流した2,024尾のうち291尾が再捕されたことから、紀伊水道の八モの生活圏は主として紀伊水道及び外海域の徳島県沿岸にあると推察されています(上田, 未発表)。このようにある程度の知見が蓄積されていますが、いずれも今と違って資源水準が比較的低い頃のもので、今回のように資源水準が高い状態での標識放流は例がないので、その意味で興味深く、今後、過去の結果と比較しながら考察する必要があるものと考えています。

再捕報告のお願い

標識八モの再捕について、これまでにご報告いただいた兵庫県の仮屋漁協、由良町中央漁協、淡路町漁協、本県の徳島市漁協、小松島漁協、椿泊漁協の関係者に記してお礼申し上げます。

今後とも、漁業関係者の皆様方におかれましては、標識魚を見つけられましたら、次のとおり情報をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

報告していただきたいこと

標識を送っていただくとともに、八モの体重と獲れた場所、獲った方の名前・住所をお知らせいただくようお願いいたします。

連絡先

電話 0884-77-1251 FAX 0884-77-2744
担当 岡崎
住所 〒779-2304 徳島県海部郡美波町
日和佐浦 1-3 水産研究所(美波庁舎)

参考文献

多々良薫; 紀伊水道の八モについて. 内海水研報, 4, 1953, 107-117.